

イソップ童話の一つに、「ウサギとカメ」があります。ウサギとカメが競走し、カメの遅さをバカにして居眠りをしていたウサギが、その間にカメに追い越されて負けてしまうというお話です。ある人は、この話について、「ウサギはカメを意識し、『私はカメよりも早いんだ』とその比較のなかで生きている。一方カメは、自分のなすべき事を冷静に見つめ、ゴールに向かって一心に走っている」と捉えています。確かに、カメがウサギとの速さの違いを意識していたら、はじめから勝ち目のない競争など引き受けていなかったでしょう。つい私達は、ウサギのように、あなたと私のどちらが速いか、優秀か、ということばかりに関心を向けてしまい、気がつけば、自分がどこに向かって生きているのかを見失っているように思えます。一方、歩みの遅い現実を受け入れながらも、ゴールをしっかりと見据えて、自分なりの歩みを続けられたカメの生き方は、なかなか魅力的です。

とは言え、人の側で設定するゴールや目標ほど不確かなものはありません。人生いつどこで何が起こるか分からないことを私達は知っているのです。ただし、「死」だけは確約されています。だとすると、「どうせ明日は死ぬ身ではないか」（32 節）と、やがて来る死に怯えながら、せめて今は目の前の楽しさに酔い痴れる、そんな刹那的な生き方しか私達には約束されていないのでしょうか。ところがパウロは、本日の聖書箇所、死者の復活、自分の命が死では終わらないことを示し、そうでなければ、キリスト教信仰も、日々が死と隣り合わせの宣教も無駄になってしまうと言っています。彼が大胆に世の海原へと歩み出せたのは、たとえ道半ばで息絶えたとしても、その働きを最も良い形で完成して下さるのが神であると信じていたからです。

「主に結ばれているならば自分たちの苦勞が決して無駄にならないことを」（58 節）知っていたのです。そして実際、パウロの命の働きは神に用いられ、この吾妻の地にも教会を生み、主イエスの信仰と希望と愛を伝え、与え続けています。

「生きがい」とは、誰かの求めに応じて生きることではないかと思えます。しかし、私たちは誰かと比べて、比べられて、能力がなければ必要とされなくなるという冷たい人間社会の一面にも生きています。ですが、私たちの命は、生にあっても、死にあっても、創造主である神によって、救いのために用いられ、繋げられ、無駄にされることはありません。その神のみ業をこそ見据えながら、主イエスの求めに応じて生きようとする…ここに、主を信じる者の限りない「生きがい」があるのです。

（文責：望月達朗牧師）

